

「名物・骨喰藤四郎」の刀身彫刻と備前国長船派の俱利伽羅龍文図像の比較

小野寺 大耀（奈良大学）

京都・豊国神社所蔵の重要文化財「薙刀直シ刀 無銘 伝栗田口吉光（名物 骨喰藤四郎）」は元薙刀であったが、磨り上げ（刀身の長さを短くすること）られ、現状は打刀となっている。いつ打刀となったか、その時期は明らかになっていない。銘は喪失しているため作者は不明であるが、これまで山城国栗田口派の藤四郎吉光（十三世紀・鎌倉時代の刀工）の手によるものと伝わってきた。

文献上、本作を吉光の作と確認できる最も古い一次史料は天正十三年（一五八五）に豊臣秀吉から大友義統へ送られた書状（豊臣秀吉書状「大友家文書」）である。このなかで秀吉は「吉光骨喰刀」としており、秀吉が書状を送った時点で本作の作者が吉光であると認識していたことが窺える。

大坂夏の陣後は徳川将軍家が所蔵したが、明暦の大火で保管先の江戸城ごと罹災し、その後、再刃（焼身になった刀に再度焼き入れを行うこと）されたため、現状の刃文と肌は製作当初のものとは異なる。「紙本墨書刀絵図」（文禄三年・一五九四）には秀吉が所持していた際に本阿弥光徳が採拓した全身押形が掲載されており、罹災する前の状態を知ることができる。

本作は表に俱利伽羅龍、裏にk（バイ・毘沙門天）・不動明王像が彫られており、これは先述した「紙本墨書刀絵図」にも見られ、焼身になる前から施されていたものと確認できる。そして、この「骨喰藤四郎」の刀身彫刻は従来、吉光の作であると概ね認識されてきた。

しかし、吉光作とされる刀剣を比較検討すると、吉光は作品に護摩箸とも二筋樋とも捉えられるような、比較的簡素な彫り物を施す傾向が確認できる。なかには表にW（カーン・不動明王）・素剣を彫り、裏に二筋樋を彫った京都国立博物館所蔵の重要文化財「短刀 銘 吉光（名物秋田藤四郎）」のような例もあるが、表現は比較的簡素である。「骨喰藤四郎」の表現は吉光作品のなかでは異質であり、発表者は他刀派、具体的には備前国長船派が関係していると考えられる。

「骨喰藤四郎」に彫られた俱利伽羅龍の図像には、備前国長船派の景光の作品に彫られた俱利伽羅龍の図像と類似性がある。早い事例として、東京国立博物館所蔵の延慶二年七月日作銘を有す景光太刀があるが、剣を呑み込もうとする口の形状や剣を握む両手両脚の構えやその位置など、両者は細部まで類似する点が多い。また、景光の俱利伽羅龍の図像は景光以降の兼光や盛景、勝光など長船派刀工の作品にも同様の図像を用いて彫られた事例が確認され、長船派特有の図像であるといえる。

本発表では備前国長船派特有の俱利伽羅龍の図像に着目し、長年、吉光作と考えられてきた「骨喰藤四郎」の刀身彫刻、特に俱利伽羅龍には備前国長船派が関わっていた可能性を指摘するとともに、本資料が薙刀から打刀に磨り上げられた時期について検討する。これらの作業を通じて、あらためて「骨喰藤四郎」の歴史的・美術史的位置について明確にすることを目指したい。